

# 読むこと部会 令和元年度の方向

読むこと部会部長：不破中学校 小宅 陽久

## 今年度の研究の方向

【令和元年度 中国研 研究主題】

### 生きてはたらく言語能力の育成 ～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

【令和元年度 読むこと部会 研究主題】

### 文章を主体的に読み深め,自分の考えを伝え合う生徒の育成 ～自分の考えを形成する学習過程に重点をおいた「読むこと」の指導の工夫～

#### 【研究仮説】

「読むこと」に関わる単元の学習を通して、単元及び単位時間において意図的かつ効果的な言語活動を位置付けたり、付けたい力を明確にしたりすることで、より主体的、目的的に読み深める力や言語活動のなかで読み取ったことをもとに形成した自分の考えを、根拠をもって適切に伝え合い、豊かに表現する力を育むことができる。

#### 【目指す生徒の姿】

- ◎読み方が分かり、目的をもって主体的に読むことの学習に取り組むことができる生徒
- ◎言語活動を通して、読む力の伸びを実感し、習得したことを活用できる生徒
- ◎言語活動を通して形成した自分の考えを根拠をもとに適切に伝え合うことができる生徒

#### 【研究内容】

##### (1) 指導計画の工夫

- ①「生きてはたらく言語能力」の更なる明確化と中国研ホームページを活用した情報の共有
  - ・「生きてはたらく言語活動一覧表」の具体的な実践と加筆修正
  - ・「読むこと」における実践の黒板写真、授業資料のホームページアップ **分担して実践を集積**
- ②学ぶ魅力・必然性のある教材開発
  - ・「読みたい」「読まなければならない」といった学びに向かう力を大切にした教材開発・題材開発の工夫 **「考えの形成、共有」の学習過程を重視した指導計画を作成し、実践すること**

##### (2) 指導・援助の工夫

- ①生徒が「主体的・対話的で深い学び」を獲得するための指導の工夫
  - ・「読むこと」の学習における学習形態の工夫 **付けたい力を明確にした言語活動を確実に設定すること**
  - ・「読むこと」における仲間との交流方法の工夫(交流の意図や視点の明確化)
- ②「どの子」にも「生きてはたらく言語能力」を身に付けるための手立ての工夫
  - ・「苦手を克服するための手立て」「得意を伸ばす手立て」を踏まえた授業の創造

##### (3) 評価の工夫

- ・単位時間、単元の終末に「確かに読み取れた」「考えが深まった」という実感をもつことができる場の設定

## 補足資料 全国大会後の「読むこと部会」の歩み

### ① 平成29年度（全国大会）の成果

全国大会では岐阜市立陽南中学校において北原章大先生による「君は『最後の晚餐』を知っているか」という説明責文章を扱った授業が公開された。当日、陽南中学校の生徒たちは、仲間と意見交流しながら、筆者の「物事を分析的に見る」というものの見方、考え方について、自分の知識や経験とつなげて考えをもつことができていた。説明的文章を正確に読み解いたうえで、自分の考えを形成していく授業づくりは、今後の国語学習において大変提案性のある実践であった。この1時間を創り上げるまでに、何度も指導案検討を行ったり、西濃地区の先生方と意見交流を行ったりしてきた。様々な先生方の思いや指導の手立てが詰め込まれた一時間になったと考える。当日の研究会では、西濃教育事務所の馬淵尚美課長補佐に次のようなご指導をいただいた。

本県では、全国学力・学習状況調査において「考えの形成」に関する問題は、全国平均を上回っている。これは、「考えの形成」を大切にきた実践をしてきた成果である。本授業も確かな読みを自分の考えの形成に結ぶ学習であった。確かな読みがあってこそ主体的、意欲的な学びが生まれる。単位時間の学習が単元の終末につながっていて、生徒は言語活動を常に意識しながら学習を進めていた。全体交流での教師の投げかけや生徒同士のやりとりの中で疑問を解決しながら課題に向かっていった姿はまさに主体的な学びであった。自分の考えをつくる場面では、筆者の文章の良し悪しに執着しないようにすること、教材文に立ち戻り根拠とすることに配慮しながら、具体的な場面で考えていくことを意識したい。それが、学習指導要領にある「知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと」である。言語活動に決まりはなく、生徒の実態を的確に把握して適切な言語活動を設定し実践を積み重ねていくことが大切である。

この全国大会の授業実践を大切に、岐阜県下において積極的に「考えの形成」の授業づくりに力を入れていきたいという方向性を見出した。このような成果と課題に加え、次の3点についても踏まえながら読むこと部会の研究主題を設定していった。

#### i 今日的な課題について

PISA2012（平成24年実施）においては、読解力の平均得点が比較可能な調査回以降、最も高くなっているなどの成果が見られたが、PISA2015（平成27年実施）においては、読解力について、国際的には引き続き平均得点が高い上位グループに位置しているものの、前回調査と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている。情報化の進展に伴い、特に子供にとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかとなったものと考えられる。この結果の推移を踏まえ、指導を改善していく。

#### ii 岐阜県の生徒の実態（全国学力・学習状況調査より）

平成29年度の全国学力・学習状況調査では、全国的に伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらと比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。また、各学校で言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られている一方、依然として教材への依存度が高いとの指摘もあり、更なる授業改善が求められる。

岐阜県においては「国語A、Bともに全国平均生徒率を上回る数値で推移している。この結果は「知

識及び技能」の定着や、それを実生活の様々な場面に活用する力が概ね身についていることを示している。しかし全国平均は上回っているが、依然平均点の半分に満たない生徒は一割程度存在する。また、生徒質問紙「国語の勉強は好きだ」の質問に対して「当てはまる」と答えた生徒は27.1%であり、正答率の高さとは反対に、国語の学習に対して満足感や充実感を感じたり、国語の力が付いたと実感したりしている生徒の割合は低いことが明らかになった。

### iii 新学習指導要領で求められている「読むこと」の力について（学習指導要領解説国語編より）

「C 読むこと」の指導事項は、学習過程に沿って、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成、共有」で構成されている。今回の改訂では、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置付けてある。[知識及び技能]の「読書」に関する事項との関連を図り、生徒の日常の読書活動に結び付くようにすることが重要であると述べられている。全国大会での成果と課題を踏まえ、「①言語活動を確実に設定すること」、「②「考えの形成、共有」の学習過程を重視した指導計画を作成し、実践すること」の2点に重点を置き実践を積み重ねていく。

これまでの研究から明らかになっているように「読むこと」の学習は他領域の学習と比べ、内的な活動であるため、力の高まりを自覚することが難しい。そこで、「読むこと」の学習においては、教材の生かし方、単元構想の工夫、言語活動の充実などを図ることで学ぶ目的を明確にすることが必要となる。言語活動、付けたい力を確実に設定した上で学習を展開していく。そして、文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の既存の知識や様々な経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしていく。このようなことを意識して「読むこと」における指導を行っていくことが文章を読んで主体的に読み深めていく能力を育成することにつながっていくと考えている。

## ② 平成30年度の実践報告

平成30年度は、全国大会の実践を土台として、「①言語活動を確実に設定すること」、「②「考えの形成、共有」の学習過程を重視した指導計画を作成し、実践すること」の2点に重点を置き、実践を積み重ねてきた。

### 【「考えの形成、共有」の学習過程を重視した実践例の紹介】

#### **実践 I** 垂井町立垂井北中学校 伊藤 友翼 教諭

○単元名「京都大学総長に学ぶ『論説』」

○教材名「作られた『物語』を超えて」(光村図書 三年)

※言語活動→筆者の主張を支える論理構成を学び、筆者のものの見方や考え方に対して自分の考えをもつ

※付けたい力→文章の論述の過程から、筆者のものの見方や考え方の進め方の意図をとらえ、文章全体の理解を深めるとともに人間、社会、自然などについて自分の考えをもつことができる(読むこと エ)

#### i 導入について

導入では、筆者の主張を確認して課題をつくった。筆者の主張を確認したうえで、「筆者がこのような主張に至るのは、人間をどのように見ているからだろうか。」ということ投げかけ、課題化を行った。主張を確かめ、筆者がその主張に至った論理を考えるきっかけとすることで学ぶ必然が生まれ、生徒は主体的に学習に入っていくことができた。

## ii 展開について

本時では、展開において「事例」「考察」「主張」の論理構成の考え方を示し、事例から主張を導き出す「主張」にこそ筆者のものの見方や考え方がにじみ出ていることを確かめて活動に入った。机間指導のなかで「ゴリラの事例から主張につながるのはなぜだろう。」と問うことで、「事例」「考察」「主張」のつながりや関係性を捉えることができるようにした。また、「考察」を整理する際、言葉のもつ性質としてまとめていくことで、筆者の人間観との混同を避けるように工夫した。

## iii 終末（評価）について

本時は人間観をとらえる活動であるため、「人は～である。」の話形を示して全員に書くようにした。生徒の振りの書き方に条件を与えることで、生徒は言葉を選び、筆者の人間観についてまとめることができた。

### **実践Ⅱ** 岐阜市立長良中学校 若原 雅史 教諭

○単元名「未来へ向かって」

○教材名「誰かの代わりに」（光村図書 三年）

※言語活動→『自分らしさ』を見つけるには、どのようなことを大切にするとよいだろう』について、意見を述べ合うこと

※付けたい力→文章を読んで考えを広げたり、深めたりして、人間・社会などについて自分の意見をもつ力（読むこと エ）

#### i 問題（課題）意識が連続し、「単元のつけたい力」を確実に身に付ける単元指導計画の作成

本単元では、「自分らしさとは何か」について考えさせる資料を提示し、資料の内容に共感させ、「自分らしさを見つけるためには、どのようなことを大切にすればよいだろう」という疑問を抱かせたいと考えた。そこで「誰かの代わりに」の本文を通読し、『誰かの代わりに』という精神こそが社会を生きていく上で大切だ、という鷺田さんの考えについてどう思うか。」と投げかけ、教材を読み深めていく必然をもたせることができた。

#### ii 単位時間の役割を踏まえ、「見方・考え方」を大切にしたい指導の工夫

第7時において生徒たちは、『人のつながり』から考えようとする『見方・考え方』と『自分の内面』から考えようとする『見方・考え方』の二つの「見方・考え方」から考えを形成しようとすると考えた。意見交流をする中で、異なる「見方・考え方」にふれて考えることで、自分の考えと、異なる仲間の考えとを比較・検討しながら考えを深めていくことができた。

#### iii 教科の本質に根ざした学習集団の育成

第7時の交流の際に、教師と生徒との一対一のやりとりにならず、生徒が発言した意見に対して「○さんが言った意見に対してどう思いますか」と問い、生徒たちどうして考えを深め合っていくこと大切にしていきたい。少人数交流等を行わなくても、全体交流の中で、生徒たちどうして対話し、深め合っていく姿を創り出すことができた。

### **【付けたい力を明確にした言語活動を設定した実践例の紹介】**

### **実践Ⅲ** 可児市立蘇南中学校 干場 康平 教諭

○単元名「走れメロスを実況中継！あなたはアナウンサー！」

○教材名「走れメロス」（光村図書 二年）

※干場先生の実践につきましては、単元構造図を作成していただきましたので次ページに掲載いたしました。

### ③ 平成30年度の成果と課題

全国大会の成果と課題を受け「自分の考えの形成」を重点とした実践を多く行ってきた。それによって「自分の考えの形成」の授業の仕組み方がより明らかになってきた。教材となる文章を大切にしながら、自分の経験や社会生活等と関連させて自分の考えをもつことができるような実践を今後も積み重ねていきたい。どの実践でも、単元の付けたい力を明確にし、単元を通して力を付けていくことを大切にしてきた。教材の生かし方、単元構想の工夫、言語活動の充実等を今後も意識しながら、学ぶ目的を明確にして、主体的に「読むこと」の学習を行ってきた。

### ④ 今年度の方向

令和元年度（平成31年度）は、部員の先生や各研修校で積極的に取り組んでいただいた『『自分の考えの形成』に重点を置いた実践』、「付けたい力を明確にした言語活動を位置付けた実践」を継続して行っていき、岐阜県下にその実践を広めていきたい。そのための手立てとして、中国研のホームページへの実践の掲載を積極的に行っていきたい。部員の先生方をはじめ、県下にはすばらしい実践を行っている先生方がたくさんいる。その実践を県下の先生方が活用できる形でホームページに掲載し、広く実践を共有できるようにしていきたい。また、読むことの授業の多くは文学的文章、説明的文章を学習材として行っている。そこで、大切になってくるのは板書である。これをベースにして岐阜県下の先生方が活用していけるものにしていきたい。そして、2021年度に計画されている飛騨地区大会に向けて実践を積み上げていきたい。

MEMO